

浜松市におけるエスニック集団の属性と集団間関係のあり方
Characteristics of Ethnic Groups and Inter-group Relations in Hamamatsu City

横田佳代子 (静岡文化芸術大学大学院)
YOKOTA Kayoko (Graduate Student, Shizuoka University of Art and Culture)

キーワード: 浜松市, 多文化共生, エスニック集団, 集団間関係

1. 問題意識

グローバル化の急進に伴い、日本の都市における外国人住民の多国籍化が加速している。浜松市には、現在 22,000 人を超える外国人住民が居住しており、その出身国も 80 ヶ国と多様である。浜松市は、2001 年に「外国人集住都市会議」の設立を提唱するなど多文化共生に向けて積極的な取り組みを続けてきたが、この 2013 年 4 月には「多文化共生都市ビジョン」を掲げ、「文化的多様性による新たな価値の創造」を標榜している。

新たな価値が生まれるような多文化共生社会の実現には、多様な文化的背景を持つ人々が社会に包摂され、異文化間交流や相互理解が促進されることが求められる。これまで浜松市では、外国人住民の約半数を占めるブラジル人を対象とした研究が進められ、様々な実態が明らかになってきている。しかしながら、その他のエスニック集団についての調査・研究は蓄積されておらず、その属性や居住実態はまだあまり明らかになっていない。また、日常的な場面における異なるエスニック集団間の接触も、現段階ではあまり見うけられない。

2. 報告の目的

本報告では、浜松市において将来的にエスニック集団間の関係性が構築される可能性について検討するために、これまで明らかにされていなかった複数のエスニック集団の属性や居住実態を可視化し、エスニック集団間関係のあり方について考察を行う。

3. 調査方法

- ・ 浜松市の外国人人口比率上位 7 ヶ国の国籍（ブラジル、フィリピン、中国、ペルー、韓国、ベトナム、インドネシア）を対象に、浜松市の外国人登録データ、浜松市教育委員会発行の統計資料、統計局の人口動態調査等の二次データを用いて、属性（国籍別構成、人口推移、在留資格、職業、性別、世帯構成、国際結婚、子どもの割合、居住分布）を調査し、分析した。
- ・ エスニック集団のキーインフォーマントを対象に、半構造化インタビューを日本語にて行った。質問項目には、コミュニティの形成、多文化共生への認識、異なるエスニック集団との関係性が含まれる。

4. 調査・分析結果

【量的調査から】

- ・ **国籍別構成:** 2008 年のリーマン・ショック以降、半数以上を占めていたブラジルの割合が減少し(2009 年比 56%→45%)、他国籍の割合が増加している。
- ・ **人口推移:** ブラジルは、2008 年のピーク時比 -9,482 人(-49 %)と減少が著しい。ベトナムやフィリピンは、現在も増加傾向にある。ただし、長期的な推移をみると、1990 年から 2013 年の間に、韓国・朝鮮を除くすべての国籍で急激な増加がみられる(6 倍~105 倍)。
- ・ **在留資格:** 多様である。ブラジルとペルーは、90%以上が永住者と定住者。フィリピンは、日本人の配偶者も多いが、興業は今ほとんどない。中国は幅が広いが、留学生と研修・技能実習生が最も多い。韓国は、大半が特別永住者である。ベトナムは、定住者と永住者が多いが、研修・技能実習生も増加している。インドネシアは、研修・技能実習生が永住者と定住者の合計を上回る。
- ・ **永住者の割合:** すべての国籍で増加している。ブラジルは、その数が減少している一方で、割合が増えている。外国人居住者全体で、永住者が半数を超え、滞在の長期化に伴う永住化の傾向が確認された。永住者、定住者、日本人の配偶者、特別永住者が、全体の 8 割以上を占めている。

- **職業**：2000年において、外国人総数のうち生産工程・労務作業者の占める割合が77%であった。
- **性別**：ブラジル、中国、ペルー、韓国、ベトナムは男女の比率がほぼ同割合である。フィリピンは、女性の割合が70%と高く、インドネシアは男性の割合が74%と高い。
- **世帯構成**：ブラジル、ペルー、韓国、ベトナムは家族世帯が多く、フィリピン、中国、インドネシアは単身世帯が多い。
- **国際結婚**：日本人との婚姻件数は減少傾向にある。主にフィリピン人女性との婚姻の減少に起因する。
- **子どもの割合**：ペルー、ベトナム、ブラジルは16歳未満の子どもの割合が比較的高い。韓国は5%未満であり、日本生まれの子どもが帰化していることが考えられる。
- **公立小・中学校への在籍**：7国籍の子どもが、外国籍児童全体(小学校 921人、中学校 505人)のほぼ100%を占める。日本生まれの子どもが増加し、半数以上を占めている。親の滞在が長期化しているベトナム(75%)、ブラジル(56%)、ペルー(54%)の子どもに特に多い。また、外国にルーツをもつ日本国籍の子どもも増加しており、フィリピンは4割、ブラジルも3割近くを占める。
- **居住分布**：全体で中区の居住者が最も多いが、ブラジルは南区、フィリピンは浜北区、ペルーは西区、ベトナムは西区と北区のように、特定のエスニック集団の一定地域での集住がみられる一方で、広範囲における点在の傾向も同時にみられる。ブラジル、ペルー、ベトナムは、公営住宅への居住率が高い。

【質的調査(インタビュー)から】

- **エスニシティの多様性**：国籍では計り知れない、多様な文化的・民族的背景の人々がいる(国際結婚による呼び寄せの子ども、帰化者、フィリピンやインドネシア出身の日系人、中国残留孤児、母国と日本の滞在経験が共に長いバイリンガルの第二世代など)。
- **コミュニティの形成**：ルーツを問わず、同胞とは、団地や近隣での付き合い以外に、派遣社員として働く工場での接点、教会やモスクなどでの宗教のつながり、親族との強い絆、エスニック・レストランやスーパーの利用など、様々な形でつながっている。また、「集まり」が多く、ゆるい形でのネットワークが形成されており、最近では、フェイスブックなどSNSでのつながりが重要な役割を担っている。
- **集団間関係**：単発的なイベントや宗教施設等での接点はあるが、それ以上の交流に発展していない傾向にある。ただし、世代間で多文化共生への認識や他エスニック集団との関係性に相違が見られる。(第一世代)文化や気質、言語の違いがあるため、他エスニック集団との交流は「難しい」と考えている場合も多い。日本社会でうまくやっていくことが最優先され、日本人の近隣住民や支援者との関係性の深化がみられる。特に、日本人との子どもをもつ母親は、学校行事や町内会など地域社会との付き合いが深い傾向がある。(第二世代)アイデンティティ、いじめや差別、帰化の問題など、異なるエスニシティ間で共感できるものが多く、日本語を媒介言語として関係性を構築しやすい。異なるエスニック集団間での交際がみられるようになった。また、リーダー層が、積極的に異文化間の交流促進を図り始めている。

5. 考察

浜松市では、外国人住民の文化的背景も多様化しており、多国籍化のみならず、マルチ・エスニック化が進展しているといえる。今後も、日本国籍取得者や異文化間結婚が増加し、エスニシティがさらに重層化していくことが推測できる。言葉の壁が厚くない第二世代以降が増加し、多文化共生都市ビジョンの立ち上げにより異文化間の交流を阻む社会的障壁が低くなることが考えられることから、浜松市において将来的にマルチ・エスニックな関係性が構築される可能性は高いといえよう。

参考文献

- 厚生労働省「人口動態統計」
 浜松市「浜松市外国人登録国籍別人員調査票」
 浜松市教育委員会指導課 教育相談支援センター「外国人のこどもへの教育支援について」
 浜松国際交流協会「浜松市の外国人登録者」<http://www.hi-hice.jp/aboutus/statistics.html>
 浜松市都市整備部住宅課「外国人世帯数及び外国人居住者の全世帯数並びに総居住者数との割合(市営住宅)」
 静岡県公営住宅課「県営住宅浜松市内外国人入居者数」